

多元的現実としてのスポーツ ～二項対立図式を超えて～ A study of sport as the pluralistic reality ~beyond the dichotomy~

1K07B203-6

指導教員 主査 石井昌幸 先生

宮田 大資

副査 寒川恒夫 先生

【はじめに】

スポーツとは、人類の進化のなかで生まれ、発展してきた文化である。その歴史のなかでスポーツとは何か、という問いをたてたとき、その意味は非常に多様であり、多面的な解釈が必要であると思われる。ここで、スポーツの意味は、儀礼との関係という視点から接近することが可能である。人間社会におけるこの二つの現象を観察すれば、この二つが互いに緊密に関係しあった文化的行動の二側面であることがわかる。スポーツと儀礼は、互いに類似した行動パターンを示している。換言すれば、スポーツはしばしば儀礼に似た特徴をもつのである。

スポーツが儀礼行動の一形式であるという仮説を立てたうえで、スポーツを多面的・立体的な層面において理解したい。そこで、スポーツと儀礼、とりわけ通過儀礼といわれるものとの関係を主題に置き、われわれのスポーツ理解を深めるとともに、スポーツと現代社会の諸問題との関連性についても考察の余地をもたらすものとして、本稿を展開する。

【第1章】

儀礼とスポーツの関係性を明らかにするうえで、儀礼、そのなかでも通過儀礼とは何か、まず根源的な問いを立ててから考察したい。ファン・ヘネップは、人生儀礼の意味を、聖と俗の分離・移行・合体という三段階構造で定義し、ターナーはその三段階構造理論をリミナリティとコミュニタスという概念を用いて発展させた。ここにおいて、イニシエーションの本質とは聖と俗の往復であるというのが示された。

ペンテコスト島の陸上ダイビングや、日本の若者宿は、一連の儀礼過程が象徴的に行われている代表的な例である。各地にみられる通過儀礼を比較すると、男子の成人儀礼において苦痛を平然と受け入れる態度を形成することが主要な課題であることがわかる。通過儀礼と青少年スポーツの比較から考えると、競技スポーツにともなう苦痛の克服には「男」として認められる名誉が与えられるが、この点において儀礼との共通項を見出すことが可能である。

【第2章】

スポーツと儀礼、そして両者の橋渡的存在ともいえる、「遊び」この三者の関係を明確にしたい。ホイジンガのホモ・ルーデンスに、ハンデルマンの儀礼・遊び・日常の三元理論を取り入れることで聖・俗二元論による世界構成を克服できる。また、ターナーのリミナリティとコミュニタス、ダ・マータのドラマティゼーションの概念は、スポーツが社

会において果たす役割を空間的に理解するのに有効である。

日本における聖・俗・遊理論の導入は、「遊び」すなわちスポーツを基軸にして世界を再構築しようとする意図が明確に存在したとはいえない。井上は、スポーツから「遊び」が衰退していく現実をふまえ、スポーツ文化の再生と再構築にホイジンガの「遊び」の要素が見直されるようになるとしたが、時代の要請は、ホイジンガやカイヨワの再浮上ではすまされず、「遊び」の規定そのものが、克服されなければならない。

【第3章】

スポーツを定義するうえで、「ゲーム」の概念は欠かすことができない。サックは、「ゲームの概念はしばしば遊戯と混同されている。」としたが、スポーツは、プレイを中核とし、ゲームによって構造化され、社会において文化として組織化された身体活動としてみることが可能である。また、レヴィ＝ストロースは、ゲームは離散的であり、儀礼が連節的であるとしたうえで、両者の不確定要素について言及している。

人間の行動の創造性を問うときに、「儀礼」が先か「遊び」が先かという、行動としての発生論がある。E・エリクソンは文化の系統発生的立場をとって、遊びを先行させ、儀礼を遊びとその末裔の個体発生、つまり人間周期全体にわたる日常生活の儀式化。ととらえている。「儀礼」と対応する「遊び」が、「限定された意味領域」であることは、両者が時間と空間の両方で規則に枠づけられた現実であることを示す。

【おわりに】

スポーツは「遊び」を中核とし、ゲームによって構造化され、社会において文化として組織化された身体活動とみなすとき、われわれの日常生活におけるスポーツの意味とはなにか。これまではスポーツを非日常的活動と捉え、単に日常、非日常という二項対立図式で意味づけ、説明することが多かった。しかし、現代のわれわれの日常生活は、これまでのようにハレとケ、生産と消費といった近代の二分法では捉えきれないほどに多様化し、しかも曖昧化している。

現代社会におけるスポーツの意味とは、非日常という捉え方ではなく、様々な状況によって区切られた多様な現実、つまり「多元的現実」のひとつとして捉えた方が理解しやすい。スポーツというフレームによって切り取られた「多元的現実」に生きる、われわれのスポーツへの関わり方は、自己をスポーツというフレームに合わせて演じてみせることである。これこそが儀礼の本質であり、スポーツの本質である。